

## クッチャロ湖での給餌の現状について

小西 敢

〒098-5722 北海道枝幸郡浜頓別町南2条1丁目12番地

### はじめに

北海道枝幸郡浜頓別町のクッチャロ湖では、1965年頃から湖が凍結する時期に死亡するコハクチョウが多数出たため、本会の名誉会員の山内昇氏によって給餌が始められた。その当時、国内のコハクチョウの総数は2,000羽と言われ、希少種扱いとなっていた。国内のコハクチョウの増加と比例して、1989年にはクッチャロ湖に約1万羽が飛来し、国内の重要な渡りの中継地としてラムサール条約に指定された。その後、個人によって行われていた給餌が、自治体で行なわれるようになった。給餌が行われてから20以上年が経過し、白鳥が当地の観光の目玉となった(写真1)。



写真1. 山内昇さんによる給餌(写真提供:宗谷新聞2003年4月).

### 1. 給餌量の制限

飛来数の増加と共に給餌量も増加し、飛来数のピークであった1997年10月には22,000羽まで増え、1日の給餌量が多い時で1t(餌は全て大麦)となっていた。飛来数だけの表示では、22,000羽の全てが給餌場に集まる印象を受けるが、実際に給餌場に集まるのはその半数以下で、それ以外は給餌場に集まらず、自然の水草(コアマモ等)を採餌している群れの方が全体的には多い。

本州の越冬地では、古米を無償で提供してもらえる地域もあるようだが、浜頓別町では給餌の大麦は全て購入しており、予算的な問題と湖に与える負荷を考慮して、2003年頃から給餌量の制限を行っている。具体的には、1日朝夕2回の給餌を朝1回だけにした。また、白鳥1羽に対して、100～200 g 程度与えていたのを50～100 g 程度に減らしている。給餌量を減らしても、湖は周囲27kmと広大で、豊富な自然の餌があり、湖以外で採餌を行うことはない。

## 2. 飛来数の減少と渡りの変化

1997年を境に当地の飛来数は、減少の傾向を示した。地域では湖の自然環境の変化から、白鳥が飛来しなくなったとの意見もあるが、カモ類については、種類や羽数に特に大きな変化はみられず、要因は他にありと考えられる。給餌量の制限については、先述のとおり、開始された年代と減少の年代にずれがあるため、直接影響を与えたものではないが、減少の要因の一つと考えられる。現在は、春と秋の渡りのピーク時で、5,000～6,000羽が飛来し、2009年秋は約2,000羽が飛来した。

飛来数の減少の要因の一つとして考えられるのは、クッチャロ湖よりも北に位置する稚内市声間大沼(以下稚内大沼)の給餌量の増加ではないかと考える。稚内大沼でも、飛来数の増加に伴い給餌量が増加し、近年多い時で1日数tの給餌を行っていたと聞き、コハクチョウとオオハクチョウを合わせて3～4万羽の飛来があったとの話もあった。クッチャロ湖で標識放鳥したコハクチョウが、クッチャロ湖で確認されず、稚内大沼だけで確認される事もあり、渡りのルートの変化が見られた。稚内大沼でも、2009年春から給餌量を減らす試みが行われているとの事で、今後の変化を注目したい。

なお、当地は北緯45度と高緯度にもかかわらず、コハクチョウが越冬している。給餌により白鳥を引きとめているとの意見も聞かれるが、越冬は、湖の結氷がなくなってきた1989年から始まっており、湖の凍結との関連が深いと考える。例年400～500羽が越冬するが、暖冬の年には、1,400羽が越冬し、寒波の年には200羽程度に減少する事もある。



写真2. 対策前の状況(2001年4月).

### 3. 給餌を行う上での対策

2000年頃までは、湖の岸まで人々が立ち入り、水鳥に直接触れる機会が多くあった(写真2)。国内で2004年に高病原性鳥インフルエンザ(以下HPAI)が発生する少し前から、湖畔へ上がる白鳥やカモ類の糞が多い事と交通事故の防止のため、春は飛来シーズンに仮設フェンスを張り、秋はロープを張って対策を行って来た(写真3)。しかし、秋のロープだけではロープを潜って道路に出てくるカモ類がいることから、HPAI発生後は、秋から春までのシーズン中に仮設フェンスを設置し、人と水鳥が直接触れにくいような対策を行った。また、2008年4月にはオオハクチョウでHPAIが発生した事もあり、指・足の消毒薬(製品名：ベンゼットラブ、アンテックビルコンS)や消毒マットを設置した(写真4)。カモ類はフェンスを飛び越えて出てくることもあるが、来訪者へフェンスを越えて出てくるカモ類に餌を与えないように表示や呼びかけを行い、かなりの数が制限された。

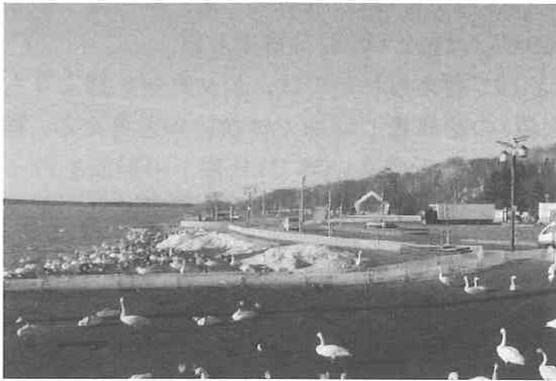


写真3. 仮設フェンス(2004年4月).



写真4. 消毒剤.

餌については、浜頓別町としては大麦を与えているが、付近の売店では食パンを販売している。来訪者からの要望も多いため、現在は、特に変更する予定はないが、道内で食パンによる窒息死の白鳥が発生したため、パンを与える場合の説明を販売員の方に依頼し表示も行った。

### 4. 給餌に対する考え方

オオハクチョウのHPAIの発生以来、各地域で給餌を自粛しており、実施している地域は減少している。また、自然環境に与える影響から給餌を見直す傾向もあり、各地で給餌についての議論が行われている。当地についても、他の地域のように担当者のみが、餌を与える方法や給餌自体を中止する選択肢もあるが、給餌量の制限やHPAI対策を行い、現在の方法で継続を予定している。当地は、白鳥飛来が観光と深く関連しており、稚内大沼で飛来数が増加した頃から、当地に白鳥を見に訪れる来訪者の数は年々減少している。札幌市・旭川市近郊の方が訪れて、「あちらでは餌をあげられないのでここまで来た」と言う声も聞かれる。当地では、各地のルールや考え方、湿地

の特性などがあるので、禁止しているところで無理に餌をあげないように説明をしている。また、新たに給餌を行いたいという地域や個人から給餌について意見をも求められるが、各地や当地の経緯を説明し、安易には給餌(餌付け)を行わないように説明している。

#### まとめ

クッチャロ湖における給餌の現状を報告した。今後も本会の研修会などで給餌(餌付け)に関する議論が行われると考える。給餌を法的に禁止する事や狩猟のように免許制や申請による許可などの意見も聞かれる。給餌を自粛した地域、昔から行っていない地域、また、白鳥と触れ合いを求めている人や研究の対象としている人などで意見交換を行い、それぞれの白鳥との付き合い方について今後も考えていきたい。給餌を中止したことにより、地域の白鳥団体が解散したとの話やHPAIに感染するのではないかと飛来地に人が来なくなったとの話も聞くようになった。給餌を行っている地域が減少したためか、給餌地域の現状の報告が年々少なくなっているように感じるため、給餌を行っている地域や自粛した地域での現状について、報告を期待したい。